



世間では、ゴールデンウィークの真っ只中！何故、今会社に居るのかとお思いのあなた、そんな気分のあなたもこの新聞を読んで吹き飛ばしてみてください！！

## 奉仕、感謝、感動

私は、未だライオンズクラブについて語ったことがないので今回はそれに触れてみたい。We Serve(我々は奉仕する)をモットーに活動している奉仕団体である。沼津地区には5つのクラブがあり、私が所属している沼津ライオンズクラブ(以下 LC)は最初に結成されたクラブで現在48年目を迎えている。沼津出身ではないので友人・知人が少なく、また亡き父がメンバーだったこともあり1995年入会させていただいた。入会当初、ライオンズマンが作った“ライオンズの光”という詩の一節に感動した。『一本の明かり 一本の小さな明かり それはわずかに身の回りを照らすに過ぎない しかし幾千本と集まれば 影と闇をなくする巨大な光明となるにちがいない』また、生後18ヶ月で病気のため視力と聴力を失ったヘレン・ケラー女史が1925年、オハイオで開催されたライオンズ国際大会で『目が見え、聞くことが出来る、勇敢な、親切で優しいライオンの皆さんに訴えたい。盲人のために暗闇と戦う十字軍の騎士になりませんか？』というスピーチの締めくくりは、何かやってみようという気になる。



平成20年度 竹の子会総会にて

ライオンズの奉仕も物の奉仕から金銭の奉仕へ。更に汗の奉仕、今では涙の奉仕へと変化してきた。奉仕を受けた人が涙を流して喜ぶような奉仕こそ真の奉仕だといわれる。沼津 LC が奉仕活動の中で最も注力しているのが“アイバンク運動”である。アイバンクに登録の方が亡くなったとき、遺族の同意を得て眼球を摘出し角膜の提供を行う。提供者一人で角膜障害者二人に光を与える愛の運動である。詳しい経緯は省くが、沼津 LC はこの運動の先駆的存在であり、1964年から動き始めている。その中心的人物が、現在89歳のご高齢ながらお元気で、各地に講演に行かれ啓蒙活動を行っておられる真楽寺住職の勸山弘住職である。檀家の通夜に行った折、亡くなった方がアイバンクに登録していたため角膜摘出手術に立ち会うこととなった。その無償の愛の姿に深く感動しアイバンク運動に傾注していくこととなる。光を失い絶望のなかであって、再び光を取り戻せた喜びは言い尽くせぬ感謝で一杯であることをいくたびも献眼を受けた方々からお聞きしている。眼がなければ三途の川を渡れない、あの世で快適に暮らせない、眼球を摘出するなどとはとんでもないという思いは誰しも持っている。私もそうであった。この思いが、『何一つ世に尽くし得ぬ、わが命 せめてなきがら 捧げまつらん』に変化するには、奉仕活動に身を置き、光を与えられた方々の声を聞かなければ難しいと思っている。そういう意味で私は幸せだと感じているし、この感性を持ち続けていきたいと念じている。

備考1)最近では眼球を摘出しないで、microkeratome という機械で角膜のみ取ることが可能になってきたようだ。

備考2) LIONS: Liberty, Intelligence, Our Nation's Safety (自由を守り、知性を重んじ、我々の国の安全をはかる) というスローガンの頭文字をとったもの最近発刊された「日本でいちばん大切にしたい会社」(坂本光司著、株式会社あさ出版)でとり上げられている14社のうちの1社を紹介する。ご存知の方も多いかと思いますが、それは富士市の吉原商店街にある個人商店「杉山フルーツ」さん。

昭和25年創業、細々とやっていた店に昭和57年に清さんという方がお嬢さんで入られた。大型店のおこぼれちょうだいの商売で、釈迦力になって働かなくてもよかったようです。それが、平成6年大型店の撤退で売上が激減し店が潰れそうな危機に陥った。そこで大いに奮起し、インターネットの活用、接客態度の改善、いいもの・新鮮なもののしか売らない、贈り物に特化、年中無休、盛り沢山のイベントなどでお客様が集まりだし、今では全国各地からお客様が殺到するようになったとのこと。一個4千円から一万円するメロン類が年間7千個から8千個売れるそうで単体でのマスクメロンの売上高では日本一のようなのだ。『あなたのお客で良かった』と言われるような“感動”を与える経営で地方の中小都市、シャッター通りという立地や規模の不利を嘆かない元気な“杉山フルーツ”に一度行ってみようかと思っている。



最近、社内に大き目の鏡を二箇所に設置しました。ときどき、鏡をのぞいて、『おはよう！元気ですか！？』って、わが身に声を掛けてやって下さい。

代表取締役社長 赤堀 肇紀